

ヒシチビゾウムシ *Nanophyes japonicus* Roelofs

【選定理由】

本種はヒシに強く依存しており、ため池のヒシがなくなると生存できなくなる。本来特に珍しい種ではないが、微小種であるため、生息情報が乏しく、県内での生息状況の変化について正確なことは不明である。しかしながら、主要生息地であるため池の環境が著しく悪化している現状から判断すると、絶滅の可能性が増大していると考えられる。

【形態】

本州産のチビゾウムシ類では比較的大型で体長 2.1~2.2mm、体色は黒色または褐色。腿節に歯がない。

【分布の概要】

【県内の分布】

豊明市、東浦町、日進市。

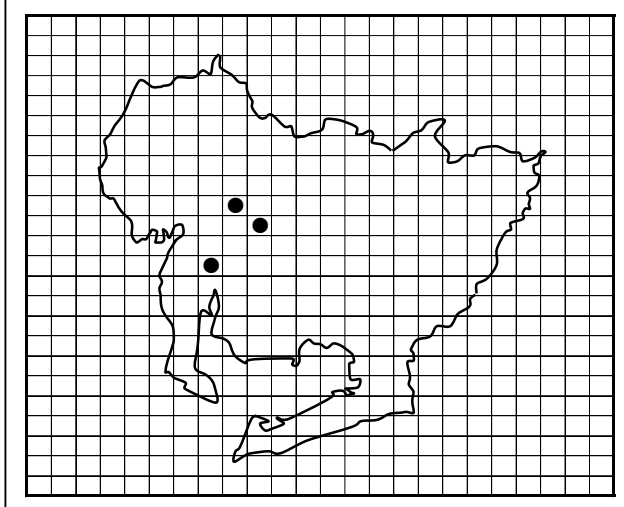
【国内の分布】

本州、九州に分布する。

【生息地の環境／生態的特性】

池に生えるヒシの葉のフロート部分に産卵する。成虫はヒシの葉を後食し、小さな丸い穴をたくさんあける。成虫を見つけられなくても、食痕を調べることで生息の確認が可能である。

県内分布図



【現在の生息状況／減少の要因】

豊明市の長間地池では非常に多くの個体を確認することができた。東浦町鰻池では小さなため池に僅かばかり生息している。しかし、他地域ではヒシの自生する池をいくつか調べたものの確認できなかった。

長間地池の環境が現状どおり維持されれば、同地での個体群が急激に減少することはないと思われるが、付近に別の生息地がないため、長間地池の環境が損なわれると、県内での絶滅に直結する恐れがある。かつてはヒシの生えるため池は随所にあり、本種の生息地も広がったのではないかと考えられる。しかし都市化による埋め立て、農業整備の一環としてのため池の改修、侵略的移入種の増殖などにより生息地の消失・分断化が進み、本種が発見された時にはすでに僅かな生息地を残すだけになっていたという可能性が強い。

【保全上の留意点】

ため池の維持管理については、そこに生息する生物種の保全についても併せて考慮して行う必要がある。また、ため池周辺の環境保全もため池に生息する希少種の保全には必要なことである。

【関連文献】

豊明市史編集委員会, 2003. 豊明市史資料編補 7 自然目録, 354pp.

(2009年版を一部修正)